

FD 通信 No. 1 2

飯田女子短期大学 FD 委員会

<http://www.iidawjc.ac.jp>

学修成果の可視化と教育の質保証

FD 委員長 三浦弥生

種々の団体などから送られてくる FD 関連の資料に目を落とせば、大学教育に求められる教育改革の流れに圧倒され、「大変な時に FD 委員長になったものだ」と思いながら、改めてこれまでの FD 通信に目を通せば、FD 委員会の活動に「大変ではない時などなかった」のだと気づかされます。

授業改善アンケート、学内公開授業、学修成果評価といった授業の評価方法の構築は、教育の質向上のための PDCA サイクルに不可欠なものであり、年度末に開催する FD 講演会・研修会は、普段慌ただしく授業を行っている教員が、大学教育に何が求められているのかを確認し、本学の教育の質やその在り方をより良いものにしていくために、どのようにしていかなければならないのかを考える機会となっています。本学の FD 活動は、本学にあったその在り方を模索しながら、確実に進められてきたのだと痛感します。

さて昨年、一昨年の FD 活動では「アクティブラーニング」をテーマに据え、学生主体の能動的な授業展開の視点から授業改善を考えました。今年度は、本学中長期計画にある「学習成果ノート」の来年度導入を踏まえ「学修成果の可視化」をテーマに、その効果的で具体的な取り組みを考えることを目的として FD 講演会を企画しました。

学修成果の可視化とは、学生の学修成果獲得の可視化ということにとどまらず、それ自体がその大学の教育の質や独創性を示すものであり、それが地域社会にそれが認められる大学が、学生から選ばれる大学になるのだと感じました。

大学教育は今、教育活動の在り方においてもこれまでの知識・技術の伝達から、アクティブラーニングという教育手法に代表されるように、学生主体の能動的な学びへと転換され、学修成果もまた教育内容の習得それ自体が教育の最終目標ではなく、「何ができるようになるか」という資質・能力といった力を求めています。そして、その資質・能力を評価する方法の構築がこれからの FD 活動において必要となってくることでしょう。

教育改革の考え方を、本学を魅力的な教育機関にする一つの道標と捉えて、委員会として前向きで効果的な FD 活動を進めていきたいと考えています。

※「学修成果評価」「学習成果ノート」の名称のほか、「学習成果」は各学習で得た成果、「学修成果」は総合的に得た学修の成果として用いています。

目 次

タイトル	FD 委員長 三浦弥生	ページ 1
<FD 講演会> 講演会報告	FD 委員会研修担当 青木千恵美	ページ 2
家政学科 高木一代 / 幼児教育学科 相澤里美 / 看護学科 遠山清香		ページ 3
<特集：公開授業・授業改善アンケート・学習成果への取り組み>		
家政学科 澤田有香 / 幼児教育学科 内田晋子 / 看護学科 細田せい子		ページ 4
<キャンパスライフに対する学生満足度アンケート実施結果>	教務課長 山口 正之	ページ 6

＜FD 講演会報告＞

今年度のFD講演会では、松本大学松商短期大学部・糸井重夫先生をお招きし、「学修成果の可視化を効果的に行うための取組」をテーマに、お話いただきました。

特に、学修成果の視覚化に至る継続的な取組としての「メモを取る力の育成」、「出席レポート」については、詳しく、具体的に解説していただくことができました。

まず、インターネットの普及、AIの発達等をはじめとする変化が速い社会の中では、教育も変化していくことを求められるようになってきている状況があること。そこで求められるのは、「知識」から「能力（コンピテンス）」重視への教育の質的転換であり、それは「何を勉強したか」から「何ができるようになったか」への転換とすることができる。そしてその「能力」を育成する方法のひとつとして、メモ力育成があるとのことでした。

メモ力には「話を集中して聞く態度」、「主体的能動的態度」、「話の内容の本質を理解する能力」、「情報を理解し、取捨選択する能力」などの要素が含まれるとの指摘から、メモ力は、様々な場面、機会に活用



できる力のように思われました。メモは、授業内容の要点をまとめる出席レポートの作成、提出へとつながり、そこから先は、添削を通しての学生と教員との信頼関係の構築へ、授業改善へとつながっている。学修サポートにおいても有効性を発揮しているとのこと。そのような流れの中で、メモ力は学修全体の核のようなものとして位置づけられているようにも思われました。

（文責 青木千恵美）

「FD 研修会に参加して」

家政学科 高木一代

今年度は「学習成果の可視化を効果的に行うための取組み」という内容で松本大学松商短期大学部の糸井重夫先生を講師に迎えおこなわれた。その中で印象に残ったのは、能力（コンピテンス）を高めるとのことだ。

文部科学省が発表した令和元年度学校基本調査の確定値によると、日本の高等教育機関への進学率は82.8%で過去最高を記録している。進学して得た知識を社会に向けてどのように活用していくのか、学んだ知識を活かすことが出来る力をつけることが、大学や短大の教育で求められていることだと今回のFD研修会で理解した。そして、どのようにすれば良いのかを考えてみた。例えば、栄養士になるための勉強をする場合、栄養に関する知識、調理に関する知識および技術、体のしくみに関する知識などの基礎知識を学ぶ。そして、バラバラとも思えるそれらの知識をつなぎ、活かすことによって、「病気の時にどんな食事をしたら良いのか」など「それぞれ個人にあった食事」を考えられるようになる。学生の間に知識を吸収し、その知識を使って、それぞれに合った食事パターンが少しでも多く考えられるようになることは「学んだ知識を社会に活かす能力」となると考えられる。しかしながら、基礎知識や技術は日々新たな発見などで変化している。教育で大切なのは、その知識をどのように得ることが出来るのかを知ること「自分で必要な情報を探すことが出来る能力」の習得であり、栄養士は日々の食生活にも関わることから、グループワーク等を通して意見等を交換し、少しでも多くの考え方や経験などに触れることによって、「柔軟に対応出来る能力」を培うことではないかと私は感じた。

社会に出てからも、学生が自ら能力を高め続けていけるよう、学生が主体的に取り組める講義を心掛けたい。

「主体的に学ぶ力を引き出す」

幼児教育学科 相澤里美

保育者養成に携わって間もない頃、私が授業で教えた知識は保育現場で働く卒業生の仕事に直接役に立っていないと知って残念に思ったことがあります。教育学を専門とし、実技は教えられない私にできることは何かと悩んだところ、近年求められているアクティブラーニングを取り入れ、学生が主体的に学べるような授業をしたいと考えるようになりました。

数年前から授業内容・方法を見直し、演習科目では学生が調べたり考えたり表現したりする活動や模擬保育を行うようにしました。講義科目では教える内容を整理し、理解してほしいことや考えてほしいことを明示するようにしました。このように全ての科目を見直したつもりでしたが、講義科目は何年経っても学生の意欲を引き出せている実感が持てませんでした。

今回の講演では「出席レポート」の取り組みについて紹介されました。毎回の授業の後に学生が授業内容をレポートにまとめて提出し、教員がそれにコメントをして返却しているそうです。学生と教員の間に一对一の応答的な関係を築くことができるので、保育者が子ども一人一人に寄り沿うことに似ていると思いました。

講演を聴きながら、私がこれまでにやってきた講義には「出席レポート」のような学生とのやり取りが欠けていたことに気が付きました。今後は学生に努力する機会を与え、その努力を認めていくことで、講義科目においても学生の主体的に学ぶ力を引き出していきたいと思います。

「FD 研修会に参加して」

看護学科 遠山清香

今回「学修成果の可視化を効果的に行うための取組」というテーマで講演会をしていただいた。この講演会に参加させていただき「学生の主体的学び・能動的態度」の育成をすることの重要性を改めて感じた。その方法の中に「学修成果の可視化」があり具体的な一例にはディプロマ・サプリメントの作成・提示、出席レポートなどの方法があると理解することができた。その一方で教員として学生との関わり方、関係性の構築の難しさについても考える機会となった。

糸井先生は学力の3要素は十分な知識・技能、能力（思考力・判断力・表現力等）、態度（メモを取る態度・コミュニケーション等）であるとおっしゃっていた。また、企業および卒業生アンケート結果では社会人として働くうえでの能力として、情報リテラシー・論理的思考力・コミュニケーション力・課題解決力・チームで働く力という5つのコア・ピンテスが上がっていた。勉強することから働くことへ活用する力は、多様な人々と学び働きながら主体的に行動する能力が求められる看護学生にも重なる部分がある。卒業までの到達目標から設定しそれに向かって育成や教育方法を検討することの大切さ、教員と学生間での到達目標の共通認識を持つことの重要性を改めて感じた。

今年教員となり学生と関わる中で、どう対応していくことが必要なのか、公演の中で今後の糸口を見つけられたように感じる。今回得た学びを行動として行えるよう、日々考え努力し学生にとって有意義な教育のあり方について今後も学び続けたい。



＜公開授業・授業改善アンケート・学習成果への取り組み＞ 毎年実施されているFD活動に対する
思いをご紹介します。このコーナーです。

公開授業を通して感じたこと、授業への思い

家政学科 澤田有香

専門教養科目の「健康相談活動」で、家政専攻の坂上ちおり先生に参観いただきました。
赴任して1年目、暗中模索状態で授業を行っていましたので、コメントをいただけて勉強になりました。
坂上先生は心理のお立場から、授業構成をみてくださいました。養護教諭の行う健康相談と心理職の行
う教育相談のアプローチの違いについて見解をいただき、それぞれの専門職が連携し、多角的に児童生
徒の心理的支援にあたることの有効性を改めて感じました。

講義の内容では、さまざまな症例について互いに話し合ったりします。ただ知識としてその症例を知る
のではなく、自分の中に落とし込む方法として、アウトプットすることは大切だと考えているため、ディ
スカッションを取り入れています。しかし、中には学生自身にとって身近な症例をディスカッションす
ることで、心理的ストレスを感じる学生もいます。そうした活動を行う際には、事前に、よりよく学生を
理解しておく必要があると学ぶことができました。坂上先生が、支援される側から支援する側へ、どのよ
うに成長を促していくのが課題とおっしゃられ、その通りだと感じました。

私自身、この講義を通して、人間的に成長させていただいていると感じます。今後も学生の皆さんとと
もに学び深める授業に挑戦していきたいと思います。

授業改善アンケートを実施して —身体表現という授業の特性から—

幼児教育学科 内田晋子

今年度は幼児教育学科2年生に開講されている「身体表現」の授業改善アンケートを実施しました。
アンケートの平均値は4段階評価のうち3.6であり、おおむね良い評価であったと言えます。一方で「嫌々
受けている学生がいると思うので、一緒にやっていて気分が悪い」という内容もありました。実際に授業
を行うと、積極的に参加してくれる学生もいれば、身体表現が苦手な学生、気分の乗らない学生もいま
す。

スポーツはルールや道具、種目特有の動き方があるため、勝敗や身体を動かす楽しさを感じやすいで
すが、身体表現は“自分自身の身体”で表現をするため、どうしても“私”を意識せざるを得なくなり、
恥ずかしさや抵抗感を感じる人が少なくありません。日常生活でさえ、歩いている姿や身振り手振り、表
情、姿勢などでその人自身の在り方（その時の感情、性格など）を物語ることがあります。そのため、身
体表現の授業にはリズムに乗って自分を解放する楽しさと同時に、危険性が潜んでいると感じています。
これらを前提に、授業がどんな表現をしてもいいと思える場、安心できる場となれるよう常に意識をし
てきました。しかしながら、すべての学生が表現しやすい場をつくるのは容易いことではありません。学
生の個性やその時々の在り方によって、変化するからです。アンケートは、さらにそのことを考えるき
っかけとなりました。表現が成り立つ場とは何か。それを今後も考えていきたいと思っています。

学習成果への取り組み

看護学科 細田せい子

学習成果の指標として、試験の結果・課題レポートの内容・演習時の学生達の反応等を活用し、自分が行ってきた授業内容を振り返っている。その中で自分の考える成果とは異なる反応と向き合うことも多々あり「教える」ことの難しさを何度も痛感してきた。同時に、業務に追われる日々の中で、教員としての自覚を持って学生の学習成果と向き合い、授業展開を日々進化した内容にしていかなければならない責任も感じてきた。

その学習成果についてここ数年自分の課題としていたことがある。それは、行ってきた授業の総括的な成果が、学生達の実習内容に著名に現れるという点である。教員になってからしばらくは、それぞれの科目を展開するだけで必死だった。そしてその成果の振り返りも科目単独で行い一喜一憂していた。しかし、学生の様子を俯瞰する余裕が若干できた今、実習現場で、積極的にアンテナを立ていきいきと吸収し学ぶことのできる条件として、授業内容を「単なる知識」として身につけているのではなく「感性を豊かにする材料」として身につけていることが重要であると痛感するようになった。学生には実習で多くの事を豊かに吸収し、将来の成長への芽生えにして欲しい。そのためにも1つ1つの授業を全体の一部として構造化して捉え、それぞれの科目でどのような学習成果が必要であるのかを整理できる力をつけることが今の自分の課題であると考えている。

キャンパスライフに対するアンケート（令和元年度）実施結果より

教務課長 山口正之

キャンパスライフに対する学生満足度アンケート（令和元年度）をSD委員会が中心となり行った。調査方法については、例年同様4段階の選択で行い、調査期間は令和元年12月18日～令和2年1月22日、質問内容として、『対象者の属性』『サポート体制』『教育施設・設備』『入学後の能力や知識の変化』『学生生活等の満足度』『教育への満足度』『学習時間』について調査を行った。対象学生数は495名、回収数456、回収率92.1%（昨年度88.3%）であった。

学生生活への満足度では、「満足」「まあまあ満足」と回答した学生が80.7%（昨年度76.6%）であったので昨年度より4.1%上昇した。

『サポート体制』の調査で、昨年点数が低かった項目の「こころの健康について相談できる環境がある（2.8）（昨年度2.8）」「からだの健康について相談できる環境がある（2.9）（昨年度2.9）」と2項目ともに変化がなかった。引き続き学生に相談場所の周知を行っていききたい。また、今年度新たにWeb休講・補講サイトの利用について調査を行ったところ「Web休講・補講サイトの利用（1.6）」と点数が低く、利用方法がわからない学生が全体の20%、存在を知らない学生が14%と改善が必要であることが調査よりわかった。学生が利用しやすいように周知を行い、利用方法についてもオリエンテーション等で説明を行っていききたい。

『入学した時点と比べた知識や能力の変化』では、点数が高かった項目として「専門分野や知識（3.6）」「他の人と協力する力（3.4）」となり、点数が低かった項目として「リーダーシップの能力（2.7）」「プレゼンテーション能力（2.9）」となった。本学の特徴として、資格取得を目的としたカリキュラム構成が主となっているため、専門知識の修得はできているが、インプットした知識を発信したり、表現したりする機会が少ないのではないかと考えられる。今後、授業だけでなく正課外活動（クラブ活動等）の中でも、プレゼンを行う機会を検討していききたい。

今年度の調査では、新たにWeb休講・補講サイトの利用を調査することができた。学生へ提供しているサービスが、実際には学生に行き届いていない点について考える機会となった。また、今年度、学習成果の可視化について検討を行った。学生が授業で何を学び、何ができるようになったのか可視化することで、自分の成長を実感できるのではないかと考える。この学習成果の可視化が学生の能力の向上に役に立てればと思う。

編集後記

FD通信12号をお届けします。お忙しい中、寄稿にご協力いただいた先生方に感謝申し上げます。今回〈公開授業・授業改善アンケート・学習成果への取り組み〉に対する先生方の思いを取り上げました。各学科ではどのようなことを実施しているのか、各先生方の思いを知る機会にさせていただけたらと思います。本通信で多くの情報が共有され、今後のFD活動がより充実したものになることを願います。

（編集担当：中山美香）

飯田女子短期大学FD通信 No.12 （発行日 2020年3月31日）

FD委員会委員長 三浦弥生

委員 青木千恵美 竹村春香 中山美香 牧野寛美 山口正之

※FD通信へのご意見ご感想をお待ちしております。 fd@iidawjc.ac.jp